

# コプト音楽<sup>1)</sup>の歴史

水 野 信 男

Nobuo MIZUNO : COPTIC MUSIC

—AN HISTORICAL APPROACH

ABSTRACT : Coptic history is necessary to an understanding of the state of Coptic church music. From ancient times, Egypt has been under the influence of various races, that is, Greeks, Romans, Arabs, Turks. Nevertheless, the Copts have been less strongly influenced by these races up to now. The reasons are as follows. (1) Since the Copts quarrelled with the Greeks and the Latins from the West in the Council of Chalcedon in 451 over issues of nationalism and Christology, they chose to live their religious life entirely on their own and systematically avoided contacts with the Byzantine and Roman branches of Christendom. (2) After the Arabs invasion of 641, the Copts began to experience exactions and persecutions. So, they were gradually reduced. In spite of that, we can still say that the Moslems have treated the Copts rather generously. (3) "The Copts are a people of indomitable presumption and intrigue." "One of the most remarkable traits in the character of the Copts is their bigotry." (E. Lane. The Manners and Customs of the Modern Egyptians) In their history, the Copts lived so isolatedly and absentmindedly that they forgot their tradition and even themselves.

Consequently, it is to be assumed that even today Coptic music has elements of the music of the ancient Egyptians and the early Christians.

## I 東方教会音楽概観<sup>2)</sup>

ギリシヤ正教会は、ひとまずおくとして、中近東一帯のおもな東方教会<sup>3)</sup>には、シリア教会(ジャコバイト、メルカイト、マロナイト)、アルメニア教会、コプト教会、エチオピア(アビシニア)教会、スラブ教会などがある。

東方教会は、西のローマ・カトリック教会のような中心的存在がなく、それぞれ、各地方に分かれ、限定された領域を保っている。東方教会の現代の様相は、その「過去の繁栄」の陰影にすぎないといわれる。<sup>4)</sup> おのおのの東方教会と、その相互の関連などの研究は、まだ初期の段階にあり、その全貌を知ることは、今のところむずかしい。<sup>5)</sup>

次に、おのおのの東方教会の音楽の特徴を、若干あげてみよう。<sup>6)</sup>

シリア教会の音楽は、ペルシヤ、アラビア音楽に強く影強されたもので、豊富な、さまざま

な音階組織をもっている。アルメニア教会の音楽は、旋律の充溢、装飾の豊かさの点で卓越している。エチオピア（アビシニア）の教会音楽は、<sup>7)</sup> その宗教詩、音楽に関して伝えられてきた資料などから推察すれば、以前は、相当高い水準にあったことは明白である。しかし、今日では、かなりレベルの低いものとなっている。これに反し、コプト教会の音楽は、現在もお、きわめて豊富で表現力に富んでおり、おとろえてはいない。アルメニアおよびシリアの正統派の教会は、エチオピア教会<sup>8)</sup>と同様、コプト教会と親密なつながりをもっている。<sup>9)</sup>

これらの東方教会は、その初期においては、共通の起源をもっていた。

## II コプト音楽小史

コプト音楽の歴史は、1. 成立から全盛まで、2. イスラム支配下の時代、3. 現代、の3期に分けることができる。

### 1. 成立から全盛まで（1～5世紀）

エジプト史におけるコプト関係事項・略年表

	エジプト史	コプト史
1A. D.	323～30B. C. ヘレニズム時代 アレクサンドリア、文化の一大中心地となる	
		41 聖マルコ、アレクサンドリアに来る アナニアスに洗礼を施す 284 コプト殉教者暦はじまる（ディオクレティアヌス帝即位） ローマの迫害（284～303） 332 エチオピアもアレクサンドリア教会に属する 395 ローマによるコプト教公認 451 カルケドン会議（ビザンツから分離）
500	640 エジプト全土、アラブに征服される 705 カリフ、アブドラ・イブン・マルワーン の統治となる	
1000		c. 1000 コプト教会の中興
1500	1517 オスマン帝国に併合される	
1900	1805 モハメッド・アリ王朝（～1952） 1881 イギリスの保護領となる	1798—1799 ナポレオンのエジプト遠征 （支配は1801まで）＝コプト再発見
	1922 立憲王国となる（名目的な独立） 1953 共和国宣言	1955 コプト学院の創設（カイロ）

この時期は、さらに、次の3期に分けられる。

### (1) 1～2世紀

コプト教の成立の事情は、<sup>10)</sup> はっきりしていない<sup>11)</sup> が、最初の布教の地は、アレクサンドリアで、創始者は、キリストの使徒のひとり、エヴァンゲリストの聖マルコだといわれている。かれは、現在までとぎれることなくつづいている116人の司教の最初の人であった。<sup>12)</sup> この聖マルコが、西暦41年、<sup>13)</sup> アレクサンドリアに来て、Ananiasに洗礼を施してもなく、キリスト教はエジプトに広まりはじめた。1世紀ごろのエジプトでは、町と村の精神生活は、まったく異なっていた。前者はヘレニズムの影響を受けたが、後者は以前のままであった。このような状態のエジプトの、最初のキリスト教集団は、たいていは、低い素性の人々や、当時のヘレニズムの混合文化をうけ入れた少数の富める町の人々で構成されたが、いずれの場合も、かれらは、みな、純粋なエジプト人たちであった。礼拝様式は、まだ組織化されておらず、宗教儀式の風習は各集団で非常に異なっており、いろいろのヴァリエーションがあったようである。聖書とグノーシス派に関する、最近発見されたコプト語のパピルスから、すでに2世紀までには、キリスト教は、下エジプト、上エジプトにかなり広くひろがっていたことが、確証されるに至った。<sup>14)</sup> アレクサンドリアの Philōn, Didymos らがこの世を去ったあとをうけ、Klaudios Ptolemaios, Plutarchos などが活動していた時代のことである。K. Ptolemaios は〈Harmonika〉を書き、Plutarchos はエジプトを訪問している。Plutarchos は、「エジプトの職業歌手と職業器楽奏者の近況」についてのべているが、この題名から推断すると、この演奏家たちは、まだ古代の神殿音楽の系統に属しているものことらしい。<sup>15)</sup>

### (2) 3世紀

アレクサンドリアで、キリスト教の大きな集団が形成された。アレクサンドリアの Athenaios と Clemens の書は、この時代に成立したもので、当時の音楽文化への多くの論及がみられる。コプトの殉教者の暦は、Diocletianus 帝の即位の年、すなわち、284年から始まる。3世紀末には、初期キリスト教の最古の楽譜〈オクシリンコスのヒム〉<sup>16)</sup> がでた。その旋律の構造と語法 (Ausdruck) は、はるかに東洋的感觉に近い。また、別の、とりわけ〈キリエ・エレイソン形式〉などにみられる要素は、この時代に、古代の「太陽崇拜」の儀式から借りたものである。

### (3) 4～5世紀 (→7世紀)

4世紀に入ると、キリスト教はエジプト全土はもとより、スーダンにまでひろまり、一方、アレクサンドリアには、大学ができた。

4世紀以後、5世紀の半ばまで、コプト教会は、その全盛期をむかえることになる。ここでは、ビザンツの影響のもとで、コプト典礼の形態が完成した。パノポリス Panopolis (上エジプトの Akhmim) における Pambo(n) と Zōsimos の文書によれば、当時、アレクサンドリアや砂漠地方の修道院に、2つの異なった声楽の形式があった。この時代には、すでにアンティフォナルな歌の手法がみられたが、これは、古代エジプトからの習慣の継続とみてよいだろう

う。<sup>17)</sup> また、小鐘、シストルムなど、礼拝儀式で用いられた楽器も、やはり古代エジプトの遺産とみられる。<sup>18)</sup> 原始キリスト教の最初の3～4世紀間の形成段階でのコプト思想の影響は重大であるが、ほとんど知られていない。それは、アレクサンドリアの有名な教義問答派を確立した教会の教父のほとんどは、かれらが、文章を書く場合、おもに福音書とビザンツ文明の言語であるギリシア語を用いたので、コプトとしてよりむしろギリシア人としてあやまって信じられてきた、という理由によるのである。<sup>19)</sup>

451年、カルケドン会議において、コプトは、キリスト単性説を奉じ、論争の末、ローマ・カトリック教会、ギリシア正教会から分離した。<sup>20)</sup> この会議では、キリスト単性説をその教義として支持したジャコバイトと、コンスタンチノーブル派のメルカイトの2つのグループが、互に論争した。前者のグループに属するものにはコプト、ヌビア人、アビシニア人がいるが、ヌビア人は、その後イスラム教に転向した。コプト、アビシニア人は、現在までキリスト単性説を奉ずるキリスト教徒である。<sup>21)</sup> カルケドン会議の論争は、民族主義とキリスト論にもとづくものであった。論争の末、コプトは、他のキリスト教徒から分離することで、完全にかれら独自の宗教生活の道を選んだ。この結果、コプト教徒は、キリスト教界のビザンツ派、ローマ派との接触を、組織的に避けた。そして、自分たち以外のキリスト教徒と分かれ、歴史的にも、地理的にも、孤立して歩むことになった。こうして、コプト教徒は、長い道程の間に、自身の存在さえも忘れ、伝統への自覚もたなくなってしまう。

コプト教会は、カルケドン会議と、それにとまなうビザンツからの分離を境に、その後、次第に衰微の傾向をたどり、やがて、イスラムのエジプト支配の時代をむかえる。

## 2. イスラム支配下の時代（7～19世紀）

### (1) 640～1000年頃

640年、エジプト全土はアラブに服従した。<sup>22)</sup> この結果は、今までビザンツ式の礼拝儀式にしたがっていたコプトに対して、エジプトの民族意識に根ざしたそれへの復帰を呼び起こすことになった。また一方では、アラブは、エジプトの民族音楽の更新に貢献した。楽器の製作の面でも、いろいろ新しい創造性の試みがあった。<sup>23)</sup>

この時代のコプトのいわゆる折衷主義は、およそ10～11世紀のコプト語のマニュスクリプトに、はっきりあらわれている。<sup>24)</sup> これは音楽的にはまだ解読されていないが、そのエクフォネティック形態は *Lectio solemn* のためにつけられた記譜法 (notation) らしいとされている。コプト資料中の、他のネウマあるいは演奏技術のための指定記号は、ギリシアまたはビザンツの専門用語や、ユダヤのエクフォネティック・サイン (taamim) から取られている。taamim は、9世紀ごろ、シナゴグ音楽において制定されたものであるが、<sup>25)</sup> これがコプトの聖句集 (text) の中にあらわれることは、コプトとユダヤの宗教歌が互に関連をもっていることを証明している。コプトの聖句集の中の、いくつかの句読点の意味は、J. Muysers<sup>26)</sup> によってとりあげられている。アクセント記号、エクフォネティック・ネウマの、コプト音楽への一時

的導入の試みは、1997年、アラブの出した「コプト語の禁止令」に関連している。すなわち、コプトは、忘れるおそれのあることがらを、記号で残しておこうとしたのである。

## (2) 1000年頃（コプト音楽中興の時代）<sup>27)</sup>

1000年頃、コプトの音楽と芸術に革新が起き、コプト語の詩の最後の最盛期となった。歌曲形式の詩は、旋律をつけてうたわれたらしい。これはギリシア音楽によって影響されたものである。このころのものとして、民族的な宗教伝説と歌が知られている。これらのコプト芸術と詩のスタイルは、古代エジプトにその根源をもつものである。当時のコプト音楽の旋律群についても、同様のことがいえよう。この世俗的・宗教的コプト音楽の表現形態は、中世を経て、近代の、典礼歌はもとよりエジプト人の音楽芸術一般にも適用された。なお、コプトの世俗音楽は、かつて存在したものが、中世に一度消滅して、現代になって復活したといわれている。

## (3) 1000年以后

1000年以后になると、コプト音楽は純粋にモノディックな礼拝音楽として凝結した。このため、それ以上発展することはなかった。そして、主として、オーソドックスな儀式の中で生きつづけ、今日に至っている。

また、アラビア語が徐々にコプトの日常生活と典礼の中に入ってきて、この間にコプト語は死語となっていった。コプト語は、今日、典礼語として、なお残ってはいるものの、上エジプトのいくつかの村で話されているほかは、ごく少数の教養人、学者、司祭たちのあいだで、かろうじて理解されているにすぎない。

さて、イスラム支配下の時代を通じ、コプトは、アラブの種々の迫害をうけ<sup>28)</sup> おとろえていった。<sup>29)</sup> とはいえ、そうした迫害にもかかわらず、一般には、アラブはコプトに対して比較的寛容な態度でのぞんできたといえるだろう。<sup>30)</sup> とりわけ、1805年以后は、モハメッド・アリ<sup>31)</sup>王朝のもとで、信教の自由が認められ、コプトの教勢は回復に向かうことになる。こうして、圧倒的なイスラム支配下のもとでも、コプトはなお独自の歩みで現代まで生きつづけることができたのである。

もっと広く、エジプト史全体の中でみるならば、次のように要約できよう。「古代ギリシア・ローマ、アラブ、トルコの影響は、ナイルの芸術、とくに音楽を、豊かに実らせてきた。けれども、コプトにおいては、この影響はごく限られている」<sup>32)</sup> と。

なお、18世紀末に至って、ようやく、ナポレオンのエジプト遠征（1798—99）を契機として、コプトはヨーロッパ人によって再発見され<sup>33)</sup> それは、現代のコプト研究史へと展開することになる。<sup>34)</sup>

## 3. 現代<sup>35)</sup>（20世紀—革命以後—）

エジプトが立憲王国を経て真の独立を達成したのは、1953年の共和国宣言以降のことである。「アラブ連合（共和国）では、以前のようにイスラム教徒によってコプト教を圧迫することなく、（イスラム教、コプト教の）どちらもアラブ連合の文化的母体として重要視している。」<sup>35)</sup> 「また近代のコプトは新しい生活に則したコプト音楽を生みだし、かつての伝統をよ

み返らせる努力をつづけている。』<sup>36)</sup>

1955年には、カイロにコプト学院 The Intitute of Coptic Studies——院長 Ragheb Moftah 師——が創設され、多くの部門の中にはコプト音楽部門も含まれている。

コプトおよびコプト音楽研究は、前述の18世紀末のナポレオンのエジプト遠征を契機としたコプト再発見以来、おもに、コプト自身によって、そのプロパガンダの手段としておこなわれてきた。コプト音楽の純学問的研究は、20世紀前半の H. Hickmann, E. Newlandsmith らによって開始されたが、それは、さらに、現代の音楽学者たちにより、本格的に進められようとしている。

現代のコプト音楽は、エジプト民俗音楽の流れに、古代エジプト、ユダヤ、初期キリスト教のそれぞれの音楽の流れが合流し、さらに、ギリシャ、アラブ、トルコ音楽などの支流が流れこんだ大河にたとえられるような、融合の音楽といえるだろう。

### III エチオピア・コプト<sup>37)</sup> とその音楽

エチオピアでのキリスト教布教も、エジプトにおけると同様、1世紀にさかのぼるとされている。<sup>38)</sup> エチオピア教会はエジプトからの伝導師によって創設されたので、エジプト・コプト教会と深いつながりをもっており、<sup>39)</sup> かつては、エジプト・コプト教会の支配下にあった。<sup>40)</sup> それゆえ、エチオピア教会は「エチオピア・コプト教会」とさえいわれてきた。1948年までは、唯一の司教としてコプトの大司教をいただいていたが、同年以降、エチオピア自身のカトリックの司教をもつに至った。それは、「アレクサンドリアの教皇と司教およびコプト教会創立者としてみとめられている聖マルコの説法」の精神的権威によって、また、そのもつとで、任ぜられた司教である。<sup>41)</sup>

エチオピア・コプトは、地理的には、むしろエジプト・コプト以上に、古代の、より純粋な要素を多く保ちつづけていると思われる。

音楽的には、「エジプト・コプトの音楽は結局エジプトの音楽であり、<sup>42)</sup> エチオピア・コプトの音楽は結局エチオピアのそれである」<sup>43)</sup> といえよう。いわゆる「輸入音楽（ここでは初期キリスト教音楽）の民族化」<sup>44)</sup> の現象である。この現象を逆にたどって、エジプト・コプトとエチオピア・コプトの両者の音楽の共通要素をもとに、初期キリスト教音楽解明への手がかりを得ようとする方法論の実行のためには、まず体系的な資料収集が、その前提となるだろう。<sup>45)</sup>

### IV コプト史とコプト音楽

コプト音楽の事情を知るうえに、コプト史は欠くことのできないものである。<sup>46)</sup> 古来、エジプトは、その歴史において、古代ギリシャ・ローマ、アラブ、トルコと、さまざまな民族の影響のもとにおかれてきた。それにもかかわらず、コプト教徒は、それらの影響を比較的少なくうけながら現代に至っている。というのは、その歴史の示すように、外的には、コプト教会のローマ・カトリック教会およびギリシャ正教会からの分離、イスラム教徒のコプト教徒に対する寛容さ、などのためであり、内的には、コプトの生来のかたくなな性質、また、伝統はおろ

か、自己をさえ忘れてしまったというような孤立無縁の放心的生活、などのためである。このことから、コプト音楽は、第1に、古代（ファラオ時代）のエジプト音楽の要素、第2に、初期キリスト教音楽の要素を、現代に伝えていると考えられるのである。<sup>47)</sup>

## 註

- 1) コプト音楽については、拙稿〈コプト音楽研究への手引〉(〈音と思索〉音楽之友社1969) 参照。
- 2) E. Wellesz. *Eastern Church Music*. (Grove's Dictionary of Music & Musicians. 以下、Grove と略記する— vol.2 p.860ff.)
- 3) 「東方教会」の概念については、平凡社・音楽事典〈東方教会の音楽〉参照。
- 4) Grove 2 p.862
- 5) H. Hickmann は、「ビザンツ、シリア、コプトの音楽を区分して、その相互関係を調べ、典礼音楽に対して、それぞれの教会がどのように貢献してきたかを研究することは、興味のあることだ」とのべている。H. Hickmann. *Quelques observations sur la musique liturgique des Coptes d'Egypte*. (Atti del Congresso Internazionale di Musica Sacra. Rome 1950) p.100 参照。
- 6) Grove 2 pp.862~863
- 7) 本稿、III〈エチオピア・コプトとその音楽〉参照。
- 8) Encyclopaedia Britannica. 1965 vol.6 p.478
- 9) R. Ménard. *Koptische Musik*. (Die Musik in Geschichte und Gegenwart. 以下、MGG と略記する— Bd.7 S.1619ff. / Grove 2 p.867 / *The Coptic Music*. (Bulletin de l'Institut des Etudes Coptes, Le Caire 1958) p.46ff.)
- 10) アジア歴史事典、世界歴史事典(平凡社)のコプト関係項目参照。
- 11) レコード〈*Coptic Music*〉recorded in St. Mark in Cairo. Folkways, Religious Series 1960 (Folkways Records Album No.8960) 解説書 p.1 参照。
- 12) op. cit. p.1 参照。
- 13) レコード〈ナイルの歌〉監修・構成・解説=小泉文夫1966(ビクター JL-66~71) 解説書— 「コプトの宗教音楽」p.34 参照。
- 14) 註12) のレコードの解説書 p.1参照。
- 15) MGG 7 S.1619
- 16) B. Stüblein. *Frühchristliche Musik*. (MGG 4 S.1036ff.) 参照。
- 17) 拙稿、1967年度・東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文〈コプト音楽研究〉 pp.89~91; pp.118~119 参照。
- 18) 拙稿, op. cit. pp.119~120参照。
- 19) 註12) のレコードの解説書 p.1 参照。
- 20) 註12) のレコードの解説書 p.2 参照。
- 21) E. W. Lane. *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*. London 1860→Everyman's Library 315. 1963 p.537
- 22) アラブの侵入については、レコード〈ナイルの歌〉監修・構成・解説=小泉文夫1966(ビクター JL-66~71) 解説書— 「コプトの宗教音楽」p.34 参照。
- 23) 拙稿、1967年度・東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文〈コプト音楽研究〉 p.100 参照。
- 24) MGG 7 S.1623~1624: Abb.4
- 25) 拙稿、1965年度・東京芸術大学音楽学部楽理科卒業論文〈ユダヤ音楽における古代的諸要素について〉 p.26ff. 参照。
- 26) 拙稿〈コプト音楽研究への手引き〉(〈音と思索〉音楽之友社1969) の総合文献表参照。
- 27) Grove 2 p.867
- 28) イスラム支配下のコプト迫害の歴史については、E. W. Lane. *An Account of the Manners*

- and Customs of the Modern Egyptians*. London 1860→Everyman's Library 315. 1963 p.544ff. 参照。
- 29) Grove 2 p.867
- 30) Grove 2 p.862
- 31) Moḥammad 'Alee Báshà→E. W. Lane. *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*. London 1860→Everyman's Library 315. 1963 p.558 参照。
- 32) MGG 7 S.1619
- 33) Grove 2 p.867
- 34) レコード <ナイルの歌> 監修・構成・解説=小泉文夫1966 (ビクター JL-66~71) 解説書—「エジプト音楽に関するこれまでの研究」pp.7~9; 拙稿<コプト音楽研究への手引き> (<音と思索> 音楽之友社1969) 参照。
- 35) レコード<ナイルの歌>監修・構成・解説=小泉文夫1966 (ビクター JL-66~71) 解説書 p.38
- 36) op. cit. p.38
- 37) 野村良雄, <コプト教会音楽の美学> (<芸術と神秘> 11) p.3 参照。
- 38) レコード, Unesco Collection. *An Anthology of African Music, Ethiopia I, Copts*. <解説> 参照。
- 39) *Encyclopaedia Britannica* 1965. vol.6 pp. 477~478 <Coptic Church>
- 40) *The Coptic Music* (Bulletin de l'Institut des Etudes Coptes. Le Caire 1958) p.46
- 41) *Encyclopaedia Britannica* 1965. vol.6 pp.477~478 <Coptic Church>
- 42) MGG 7 S.1626 および *Notentafel zu Koptische Musik* (Der 150. Psalm) 参照。
- 43) *The Coptic Music* (Bulletin de l'Institut des Etudes Coptes. Le Caire 1958) p.46; レコード, *Coptic Chants* (Institute of Coptic Studies. Section of Coptic Music. Auba Rueis Building, Ramses St. ABBASIYA, Cairo) 解説書 p.1
- 44) Grove 2 p.862 参照。
- 45) 拙稿, 1967年度・東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文<コプト音楽研究> p.121 参照。
- 46) Grove 2 p.867
- 47) *The Coptic Music* (Bulletin de l'Institut des Etudes Coptes. Le Caire 1958) p.46; なお, 拙稿, 1967年度・東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文<コプト音楽研究>第三章 (pp. 104~121) 参照。